

---

# 悩める少女と魔法薬

黒猫ふろー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悩める少女と魔法薬

### 【Nコード】

N2927F

### 【作者名】

黒猫ふろー

### 【あらすじ】

宿屋のお手伝いをしているパナのもとに、妙に印象的な男女2人が訪れる。話を聞いてみると、2人はなんだかワケアリのようで・・。ラブコメじゃないラブコメです

## 第1回

カランコローン

宿屋『踊る小鹿亭』の入り口につけられたベルが、今日も誰かの来訪を告げる。

受付で店番をしていたパナは、音につられてあどけなさの残る小さな顔をひよいとあげた。

「あつ、ギフおじさん。こんにちは」

「おう、パナちゃん。今日も頑張ってるな！」

入ってきて片手を挙げたのは、3軒隣に住んでいる顔なじみのおじさんだった。

「お父さんは中にいるかい？」

「いますよ！いま、厨房で料理の仕込みをやっています」

「そうか。じゃあパナちゃん、ちょっと上がらせてもらっよ」

「はいどうぞ」

このおじさんは八百屋を経営しており、いつもお店に新鮮な野菜を運んできてくれる。

きつと今日も、この宿に卸す野菜の品数を、父に相談しに来たのだろう。

受付の小さな椅子に腰掛けたまま、パナは厨房に消える大きな背中を笑顔で見送った。

\* \* \* \* \*

パナは、この村に住む１０歳の女の子だ。

１０歳といえはまだまだ幼い部類に入るだろう。彼女から発せられるあどけない雰囲気もそれを表している。

のんびりとした性格の持ち主だが、５歳のころから続けてきたお店の手伝いはそろそろ堂に入ってきて、最近ではこうして短い間なら店番まで頼まれるようになってきた。

もちろん、これくらいの年齢の子供なら、まだまだじっとしているよりも体を動かしているほうが楽しい時期だろう。パナも例外ではないが、でも彼女はこうして受付の机に座っている時間も結構気に入っていたりした。

家（宿屋）から聞こえてくる父や母、お客さんたちの息遣い。

ドアの向こうからもれてくるたくさんのにぎやかな音。

窓から覗く人々の賑わいと見慣れた町並み。

広がる青い空。落ちていく夕日。

そのどれもをぼんやりと、あるいは興味を持って眺めるこの時間がパナは大好きなのだ。

カランコロン

パナがそうやって受付でいつものようにのんびり時間を過ごしていると、不意に入り口のベルが鳴った。

「いらっしやいませ」

パナは笑顔で客を出迎えた。

扉から姿を現したのは１０代後半と思われる男女２人。顔に見覚え

がないので、おそらく旅の人だろう。

2人のうち女の人は、燃えるような赤い髪を持つ印象的な少女だった。思春期から大人への変貌を遂げるちょうどその境目の時期にいるような特有の雰囲気をもつ彼女は、意思の強そうなくりくりとした瞳をまっすぐ前に向けている。ウェーブのかかった髪の色に合わせたケープを羽織っており、シンプルながらもセンスのよさそうな雰囲気漂わせていた。

一方、男の人は、小麦色の髪にとび色の瞳をもった、なんともやさしげな顔立ちをしている青年だ。外套を羽織っただけの服装には特に何も特徴はないが、背が高くすらっとしたスタイルのよさが、ただのズボンと上着といった服装を不思議と格好よく見せている。顔立ちに派手さはないが、彼の持つ雰囲気は周囲の空気を和らげるだろうと容易に想像できる。

・・・と、そこまでパナが思ったかは定かではないが、どちらも整った顔立ちをしていることは間違いなかった。

（うわあ、恋人さんかな）

2人の並んだ姿はまさに一枚の絵のようだ。

10歳ともなればすこしませてきて恋愛に対して興味があっても当たり前前。

いらっしやいませ。お泊りですか？2人の関係を勝手に想像してしまい、妙にときどきしながらもパナは接客をはじめた。

「ええ、部屋を2つお願いしたいの。空いてるかしら」

すっと透るような声で少女がいう。

「はい。部屋をお2つでよかったですか？よかったら2人部屋のほ

うも空いてますが」

言ってから、パナはしまったと感じた。

理由はよくわからないが、父親から『よほどのことがない限り、部屋の種類や数については口出しをしてはいけないよ』、と謂われていたことに気付いたからだ。

パナに言わせれば2人部屋のほうがお金も安いし良いと思うのだが、とにかくいけないことらしい。

やはり言うてはまずかったのか、それを聞いてお姉さんのほうはすこしあわてたみたいだった。

「いえ！1人部屋を2つでお願いします」

「僕は2人部屋でもかまわないよ？」

いままで後ろで待っていたお兄さんのほうが口を開いた。

「フレデリク！ちょ・・・こ、この人のいうことは聞き流してください。部屋は2つで」

「なんで？2人部屋のほうがお金もかからないし、経済的だろ？僕はかまわないけどな」

この言葉に、お姉さんは勢いよくお兄さんのほうを振り向く。

「私のほうがかまうのよ！今のあんたと一緒にいたら、心臓がいくつあったってたりないじゃない。1分1秒でも離れてたいの！」

「僕は君と一緒にいられてすごくうれしいけどな。こうしている間にも僕の心臓こそ高まりっぱなしなのに」

目の前の青年が繰り出した、聞いたこともないような甘い言葉に、

横で聞いていたパナは思わずポカンと口を空ける。

それはお姉さんも同じだった。

翻った赤い髪がぱさりと動きを止めた。

「なっ・・・、何を言ってるの!!!」

子供の前よ!? あんたは今正気を失っている状態なんだから、軽々しくもそんな恥ずかしい台詞をいわないでちょうだい!!!」

あわてたお姉さんの抗議にも、お兄さんはどこ吹く風だ。

「僕はいたって正気だよ、アンジェリーカ」

フレデリクと呼ばれたお兄さんは、お姉さんの華奢な肩をつかんで自分のほうに向かせた。

熱いまなざしを送るお兄さんの姿に緊張したのか、お姉さんの後姿は抗議の姿勢をしたままカチコチに固まってしまっている。

その姿が、まるでこれからキスでもするかのように、（きやあっ）

と声には出さずパナはひとり顔を赤らめた。

そのままゆっくり、お姉さんの赤い髪にお兄さんの小麦色の髪が重なるうをしたとき、

はっと我に返ったお姉さんが、お兄さんの体を力いっぱい引き離した。

「フレデリクのバカエロ親父ーーーーッ!!!!!!!!!!」

バチーンツと激しい音が響き渡る。

部屋は2つとるったら2つ取るの! いいわね!?

早口でまくし立てるお姉さんの勢いに押され、今繰り広げられた出

来事や目の前にノビるお兄さんの姿に啞然としながらも、「で、では、こちらの記帳にお名前を記入くださいー・・・」と、パナはなんとか自分の役割を遂行したのだった。



## 第1回（後書き）

作者が甘い言葉になれてないのでめっちゃくちゃ恥ずかしかった・・・  
（苦笑）

## 第2回

宿屋の1日はそれなりに忙しい。

（近所の子たちとちやっかりしっかり遊びながらも、）夕方は夕方  
でいろいろやることもある。

父にいわれて外の倉庫に暖炉用の薪を採りに行ったパナは、薪を運  
ぶ途中に、先ほどのお姉さんが宿の庭にたたずんでいるのを発見し  
た。

（そつえば、さっきのお兄さん、大丈夫だったのかなあ）

思い出されるのは、やはり先ほどの倒れている青年の姿である。

あの平手打ちは結構良い音がでていたけれど、大丈夫だったろう  
か？

お姉さんの風になびく赤い髪に引かれ、何とはなしに視線を向けて  
しまう。

お姉さんは特に何をするでもなく、ただ庭先で風に吹かれる植物を  
眺めているようだった。

時折「ふう。」と大きくため息をついて、目線を下に下げている。  
庭先を見つめる瞳は悩ましげだ。

（・・・何か悩んでいることがあるのかな。）

心配になったパナはいても立ってもいられず、思い切って「大丈夫  
ですか？」と声をかけてみた。

「あなたは、たしかこの・・・」

突然の来訪者に、お姉さんの印象的な瞳が見開かれる。

「はい。すみません、声かけるのもどうかなって思ってたんですけど」

なんだか悩んでるみたいに見えたので。

そう告げると、それを聞いたお姉さんの顔がきよとしたものに変わった。まさか心配されるとは思わなかったのだろう。

パナを見つめる瞳がやがて笑いに変わった。

「あ、ははは。まさかあなたみたいな、何歳？」「10歳ですー」

「10歳の子に心配されるなんてね。」

よっぱど変な顔してたにちがいないわ、とお姉さんは笑った。

「でも10歳にしてはずいぶんしっかりしてるのね」

「うちはホラ、宿屋ですから。言葉遣いだけはみっちりと仕込まれました！」

へえーそうなんだ、と感心してみせるお姉さん。

「最初の話に戻しますけど、お客さん、なにか悩まれてるんですか？よかったら話してみてくださいです。何か話すだけでもすすきりすることがあるよ、ってお母さんが言っていました。」

じいっと真剣な目でみつめる。子供特有の「さあさあ逃がさないぞ」とでもいいいたげな瞳だ。

その瞳を困った様子でしばらく見ていたお姉さんだったが、やがてパナの熱意に根負けしたかのように、お姉さんは肩を落とした。

ふつと口元に笑みを浮かべる。

「そうね。・・・じゃあちょっとだけ、かわいいお嬢さんに話をしてみようかしら。」

改めて自己紹介するわね。私はアンジェリーカよ。あなたは？」

「パナです」

「パナね。・・・ねえパナ、さっきは変なやり取りを見せてしまつてごめんなさいね。ビックリしたでしょ？」

「はい。ビックリしました」

たしかにビックリしたので、正直に言う。

「あいつって名前、フレデリクって言うんだけど、その悩みの種っていうのがあいつのことなのよ。」

うーん、何から話せばいいかなあ、とアンジェリーカは言った。

「私はコルトの町で薬屋をやっているんだけど、実は、裏で魔法薬のほうも取り扱ってるんだよね」

\* \* \* \* \*

魔法薬。

それは、普通の薬とは違い、その薬効に魔力が含まれているものを

言う。

背が伸びたり縮んだり、若返ったり年をとったりと、普通の薬ではおおよそ期待できないような素晴らしい効果が得られる、まさに「魔法」の薬なのである。

魔法の使えない一般人でも飲めば魔法の効果が得らるただけあつて、その作用と魅力に欲しがるものも多い。そのため取締りなども厳しくなり、価格も非常に高価となっている。また、材料に特殊な素材が必要だったり、作業工程に何らかの魔術的な要素が必要であつたりと、何かと作るのが難しいことも特徴だ。それに加えて、魔法薬を作ることができる魔法薬師の人数が、少ないといわれる魔法使いよりもさらに少ないこともあり、それらすべてが価格を上げることにつながっていた。

つまり、市場に出回ることが少ない、貴重で高価な薬なのだ。

まあ、そんな細かい事情を幼いパナが知るはずもなく、「とにかくすごい薬だ」という認識しかできていなかったけれど。

「でも本業……ってわかるかな？ 普段やっているのは薬屋さんのほうで、必要なときにしか魔法薬は作らなかつたんだ。作るのが面倒だったし、材料もなかなか手に入らなかつたし、規制も多かったし……、何かといういろいろ大変でさ」

その辺の愚痴はまあいいとして、とアンジェリーカはぺろりと舌を出した。

「ついこの前、貴族に作って欲しいってたのまれて、魔法薬を作つただけど……」

\* \* \*

それは、3日前のことだった。

1月前に貴族から依頼された魔法薬が完成したのだ。

「やっとできたー・・・」

完成させたアンジェリーカは、薬を小瓶につめるとそのまま店の奥にあるソファーに倒れこんだ。

何しろその薬は最終工程の段階で、昼は暗闇の中、夜は液面に月を写しながら3日3晩鍋をかき混ぜ続けなければいけないというややこしい代物。

しかし、魔法薬を作るのには魔術的な要素が必要なため、他に魔術師のいないコルトの町では誰かに頼ることもできないのだ。つまり、3日間ほぼ不眠不休で彼女は鍋をかき混ぜ続けたということになる。ソファーに体重を預けたアンジェリーカは、体中にたまる疲れを感じながらぼんやりとした頭で考えた。

（取り掛かってから2週間、か。やっと薬が完成したあ・・・。）

（後は瓶にしっかりとした封をつけて、リボンもつけて箱に入れて・・・。）

（リボンは何色に、しよう・・・かな。効果が落ちないよう・・・に、保護魔法もかけなきゃ。）

（この1週間は・・・お店、閉めてたから・・・掃除もしなきゃいけないし・・・、在庫の整理もして・・・）

いろいろ考えているうちにどうやらそのまま寝てしまっていたらしい。

それからいくばくか時間が経ち、店のほうから聞こえてきた声で、アンジェリーカはわずかに意識を引き上げられた。

「アンジェリーカ、アンジェリーカ、いないの？」

どうやら自分をよんでいるらしい。

(・・・だ、れ・・・?)

「ああ、ここにいるんじゃないか。こんなところで寝ていたら風邪をひくよ?」

少しして、ぱさ、と体に重みを感じた。毛布か何かをかけてくれたようだ。

「・・・しばらく店を閉めていたようだったけど、またどこかの山にでも薬草をとりにいったのかな。」

ずいぶん疲れているみたいだし、とつぶやく声にアンジェリーカは聞き覚えがあった。

「・・・フレ、デ・・・リク・・・?」

名前を呼んだ自分の声は、寝起き特有のかすれたか細い音がした。

「・・・起こしちゃった? アンジェ、ごめん、早めに咳止め用の薬を飲んでおきたいんだ。取っていつていいかな」

アンジェリーカは目を閉じたまま小さくうなづくと、かけてあった毛布を引き寄せて丸まった。

足音が遠ざかる。壁を隔てた店舗スペースのほうで、ごそごそ、と何かを探す音がかすかに聞こえた。ときおり、コンコン乾いた音も聞こえてきて、空咳をしているんだらうと予想できる。たしかこの青年は、生まれつき気管支が弱く、いつも店から薬を買っていたような気がする。

（また、喘息がはじまったのかな・・・）

ぼんやりとした意識の中でそんなことを思った。

再び眠りに入ろうとした中で声がかかる。

「ごめん、探したけどみつからないんだー。コホ、どこにあるー？」  
（・・・むー・・・！）

眠くて眠くてたまらないときにおこる睡眠の妨害は、時に気分を苛立たせる。このときのアンジェリーカがまさにその状態だった。寝させてよ、とイラつきながらアンジェリーカは毛布にくるまったまま叫んだ。

「もうーっ、受付の真ん中にある瓶に入ってるわよ。勝手に取っただけばいいでしょー！」

そのまままた眠りの世界に入ろうとする。

ほとんど眠っているに近いアンジェリーカだったが、しばらくして「あ、これ？」とこえがした。



「へえ。瓶が変わったんだね。前のよりずっとおしゃれな感じがする。色もピンクがかったてきれいだし。ちよつとこれを飲むのはもったないかも……」 つ。……！！！！」

と聞こえたところでゴホゴホツ、ガハツと大きくフレデリクは咳き込んだ。

店舗スペースの壁を越えて、ヒューヒュー、とか細かい呼吸が聞こえる。どうやら発作が始まってしまったらしい！

今すぐ助けに行かねばならない状況だが、しかしアンジェリーカは重たく動かない思考の中で、フレデリクの言葉に何か引つかかるものを感じた。

（“へえ。瓶が変わったんだね。前のよりずっとおしゃれな感じがする。色もピンクがかったてきれいだし……”）  
ちよつと待つて、咳止めの瓶は別に変えていない。

おしゃれな感じの瓶？薬液はピンク色？

（それって……）

それってまさに、さっきまで作っていた魔法薬の特徴ではないか……！？

瞬間、『受付の真ん中』『受付棚の真ん中の段』だけでなく、『受付棚の上の中央』をも指すという図式に気がついた！  
そこにおいてあったものとは……！

まずい……っ！！！！

眠気が一気に吹き飛んだ彼女は、毛布をはぎ飛ばして店舗スペースへ向かう。

部屋を出たアンジェリーカが目にしたものは、苦しそうにうずくまるフレデリクと 床に転がる魔法薬の瓶だった。

横たわるクリスタルカットの小さな小さな小瓶。

本来なら淡いピンク色をした液体が、木製の床に広がり黒くしみを  
つくっていた。

この薬独特の甘い香りが部屋一面に広がっている。

「そんな・・・」

その光景を目の当たりにしてしまったアンジェリーカには、文字通  
り、これまでの苦勞がすべて流れていってしまった気がした。

この2週間の工程と苦勞がめまぐるしく浮かんでは消え、頭の中を  
駆け巡る。

薬を飲まれてしまうことに対して危機感を抱いていたのだが、思っ  
た以上に薬が使えなくなったショックは大きかったらしい。薬が駄  
目になってしまった、とそのまま床にへたり込みそうになる。

思考が停止しかけたアンジェリーカだったが、フレデリクのゼヒユ  
ー、ゼヒュー、という荒い呼吸ではっと意識が引き戻された。

そつだ！こうしてる場合じゃない！！

（急がないと！！）

店の棚から気管支拡張剤や咳止め薬など、必要と思われる薬を急い  
で取り出す。

水に溶かすものは溶かして。

粉のままはそのままで。

幸い薬ならたくさんある。

喘息に必要な薬をいくつか与えていく。

これはどうだろうか

これは効果があるのか

早く収まって・・・っ

・・・。。。。。。

- 
- 
- 
- 
- 
- 
-

### 第3回

症状がある程度おさまったところには、時刻はゆうに半刻をすぎていた。

ふう、と息をつき、彼の頭の下に枕を差し込む。

フレデリクは意識こそなかったものの、すうー、すうー、と穏やかな呼吸をしていた。外の雑音とあいまって、お店の中に音を刻んでいる。

・・・本当に、よかった。

その様子を見たアンジェリーカは、そつと胸をなでおろした。

いつの間にか夕方になっていたのか、差し込む西日が店内を照らしていた。

ひとまず落ち着いたアンジェリーカの目の端に、ふと、何か映りこむ。

アンジェリーカは立ち上がってそれを拾い上げると、手の中でコロコロと転がした。

「・・・あーあ。また作り直しなあ。」

西日を受けてきらめく小さな小瓶。

魔法薬は、落ち方が悪かったのかそのほとんどが床に零れ落ちていた。

垂直に持ち上げても傾けても、瓶のそこにはほんの2、3滴程度しか残っていない。

床にこぼれた分は非常に心に惜しかったが、まさかそれを回収して

渡すわけにもいかないだろう。

また、材料を集めるところからやり直すしかない。

（そして3日かけて調合して、4日かけて煮込んで・・・。）

工程を考えると頭が痛くなる。

でも、頭を抱えなければいけない現状なのにどこか落ち着いていられるのは、フレデリクの発作を止めることができてよかったと本気で思っているからだろう。

瓶を片付け、こぼれた薬液をふき取り、使った喘息の薬は余った分を薬包紙に包みなおす。

自分ひとりでは力が足りないためフレデリクは床に寝かせたままだったが、一連の出来事の後片付けは一通り終わったはずだ。

自分用に入れたお茶を飲みながら、アンジェリーカは魔法薬をもう一度作るための計画を立て始めた。

今回作ったときに材料は余分に仕込んであるものも多いから、大体はそれを使うとして。

銅の小鍋と魔力充填用のローズクォーツは新たに買い足さなくちゃいけないだろう。

期間内に純水も大鍋3杯分は精製しておかなければならないし。

そして問題は、月下草だ。

今回は依頼された貴族に用意をしてもらったが、自分の落ち度で薬を駄目にしてしまったからには、自分で探しに行かねばならないだろう。

クレアリー・ビーの蜂蜜とローズマリーは大量に必要だけど、捜しに行っている間に注文すればなんとか間に合う。

（その辺のことも考えて、必要な日数を計算すると・・・）

必要な工程を思い返すアンジェリーカ。  
計画表とにらめっこしていると、不意に背後からガタ、という音が  
きこえた。  
振り返ると、部屋の入り口にはフレデリクの姿が。どうやら目が覚  
めたようだ。

「あ、フレデリク。気分はどう？」  
「・・・・・・・・。」

声をかけたが、しかしフレデリクからは返事がなかった。  
心なしか彼のとび色の瞳はすこしゆれているようにも見えた。まだ  
体調が戻っていないんだろうか？

「フレデリク？」

どうかしたんだろう？とソファーから立ち上がる。  
するとフレデリクはハツとしたかのように体を揺らし、視線を少し  
外側に向けた。

「ア、アンジェ・・・。君が助けてくれたんだね。あの・・・その、  
ありがとう。」

「うん。そんなことはいいのよ。それより、もう大丈夫なの？」

「うん、もう全然平気だよ。・・・君のおかげさ、アンジェ」

というが、どうも様子がおかしい。フレデリクの視線は妙に熱っぽ  
いというか、熱に浮かされているような感じなのだ。

「なんだか変な感じね。熱でもあるんじゃない？」

といってフレデリクの額に手を伸ばす。一瞬彼は固まったようだったが、アンジェリーカは気にせず高い位置にある彼の額に触れた。手を当ててみたが、微妙な体温の違いはよくわからないものだ。

「うーん。熱いといえば熱い気もするけど、よくわからないな・・・。体温計でちゃんと試してみる？解熱剤だそうか？」

「ううん。大丈夫だよ。」

そういつて彼は自分の額に伸ばされている手をとった。

そして、次の瞬間、フレデリクの行動に彼女は衝撃を受けることになる。

あるうことか、フレデリクはアンジェリーカのその手をそつと両手で握りこんだのだ！

「えっ！あつ、・・・えええ！！؟؟？」

突然の彼の行動に理解ができない。

「アンジェリーカ・・・」

尚も熱く自分の名前を呼ぶフレデリク。

彼女は頭の中が真っ白になって、あわてているのに体がカチカチに固まって動かなかった。

「アンジェリーカ・・・。本当にありがとう、君は僕の命の恩人だよ。感謝しても仕切れないくらいだ」

「いゝいゝいゝ やいやいやいや！！！！そんなこと私全っ然かまわないんだから！！！！」

だから手を離して――！！と心の中で全力で叫ぶが、その叫びは残念ながら彼には通じなかったようだ。

強いまなざしでまっすぐアンジェリーカの瞳が見つめられる。

「ううん、このお礼は是非ともさせて欲しい。そうじゃなきゃ僕のがすまないんだ」

手をぐつと引かれる。気づいた時には彼の腕の中にすっぽりと納まっていた。

「? ? ? ? ? ! ! ! ! ! { { { { { @ #

悲鳴とも呼べぬ悲鳴を上げるアンジェリーカ。

じたばたともがくも、華奢な彼女のことだ。所詮体格差で勝てるはずもなく、却ってきゅ、と抱き寄せられてしまう。

全身が心臓になったみたいに鼓動が早い、血液が逆流していると思えるほど身体があつく、妙な汗までかいている。

おかしい、おかしいわよ……！

アンジェリーカはパニックになった頭で必死に考えた。

普段のフレデリクならこんな行動をとるはずない。彼はむしろ、こ  
ういうことには奥手で何もできなかったはずだ。

なのになんでこんなことになってるの？いつものフレディじゃないみたい！

なにかいつもと違うことが起こったに違いない。何、何がいつもと違った？？

(あ………!!!)



そこで彼女のぐちゃぐちゃに乱れていた思考回路が一気につながった。

（魔法薬だ！）

（さっきこぼれてしまった魔法薬だ！）

床に転がるかわいらしい瓶の姿が記憶に浮かぶ。

この2週間、彼女が誠心誠意精製していたたしかあの魔法薬は

“惚れ薬”！！！！

作っているだけならばそう強く意識するものでもなかったが、たしかその効能は、飲んでから初めて目にした人物に好意を抱く、というものであったはず！

つまり、フレデリクは、あの惚れ薬を飲んでそのまま最初にアンジェリーカを目にしていまい、彼女に強い好意を抱いてしまったのだ・・・！！！！

発作もあったし、薬液があれだけこぼれていた状況を見て、フレデリクは惚れ薬を口にしていなかったという先入観を無意識のうちに創り出してしまったらしい。

こうしちゃいられない、早く解毒薬を作らなければ・・・！

「アンジェリーカ？」

再び名前を呼ばれ、アンジェリーカはつとして顔を上げた。

そこには、抱きしめられてるというだけあって、予想以上に距離の近いフレデリクの顔が！

「いいーやあああああゝつつつ！！！！」

思いつきり放たれた彼女のアップercutが、フレデリクの顎下に直撃した。



### 第3回（後書き）

アンジェリーカは、甘い言葉に対しての免疫が皆無です（笑）

## 第4話

\* \* \* \* \*

「それからすぐ、解毒薬をつくろうとしたんだけど……。あ、惚れ薬の場合、その元となった惚れ薬を使えば解毒薬が作れるんだけどね。」

瓶に残ってる2、3滴じゃフレデリクをすこし落ち着かせることくらいしかできなかった。

それで、薬の納付の期限もあるし、少しでも早くアイツを戻したかったから、その日のうちに村を出てきたのよ」

説明をする高い声が、空に溶けては消えていく。

アンジェリーカは簡単に「村を出る」の一言で済ませたが、その「出る」という行為に実は大変な労力が必要だった。

薬のせいで、いつもと様子が異なるフレデリクをみんなに見せるわけにはいかなかった、というより見せたくなかったため、なるべく人目につかないように行動したからだ。

フレデリクを何とか説得し（彼自身は『自分は正気だ』となかなか納得してくれなかった）、彼の家族に対して『少しだけ出かける』という内容の書置きを書かせて（薬の材料がどうしても早急に必要になったため、手伝ってもらうことになった、とウソではないが真実でもない書き方をさせた）、荷物をまとめ（フレデリクの荷物は用意をあきらめて次の町で買うことにした）、馬車を借りて（夜になつてしまつていたため、貸し馬屋をたたき起こした）、最低限の休みだけで馬を夜通し走らせたのだ。

途中何度かフレデリクにも馬車の制御を任せたものの、いかんせん寝不足で疲労がたまっている体では、体力の限界に近かった。

フレデリクについても、惚れ薬のことをきちんと説明して納得はしてもらったのだが、やはり魔法薬の威力は絶大で、自制をもらってはいても時折こちらに向けられる熱っぽい視線がどうにも居心地が悪い。

翌日、3つ隣の町でやつと宿をとることを決めたときには、疲れと緊張の糸が切れたことで、アンジェリーカは泥のように眠りに落ちてしまったのだった。

\* \* \*

「本当ならこの村は通り過ぎるはずだったんだけど・・・、」

ここまでの行程を回想してしまったアンジェリーカは、一度はパナに向けていた視線を下に下げて小さくため息をつく。

「聞けば、ここからパキラ山へ続く道が、土砂崩れで通行できないって言うじゃない。」

せつかくここまでとばしてきたっていうのに、足止めよ？足止め。村の人に聞いても、通れるようになるのに1週間はかかるっていうし、私たち、いったい何のためにここまで急いだの、って感じじゃない？」

馬を休ませようと立ち寄った際に、村人にその話を聞いたのは今日の午前中のことだ。

あまりのショックに、思わずその相手につかみかかってしまったのは仕方がないことだと思う。

「こうしてる間にも、魔法薬の納付の期限は迫ってきちゃうし、フレデリクの自制心だってそろそろ限界だし。

いつそ山を回り込んで反対側に行こうかとも思ったけど、それじゃあもつと時間がかかっちゃうらしくって・・・。

何かしようにも手詰まりなのよ。もう、私、いったいどうしたいいの?！」

ため息混じりに吐き出すアンジェリーカ。

頭を抱え込んだ彼女の顔が、背の低いパナにはばっちり見えてしまい、すこし居心地が悪く思った。

パキラ山脈の名前の由来ともなったパキラ山が先日の大雨で土砂崩れを起こしたことは、この村の住民なら誰でも知っている。

パナみたいに、あまり村から出ない者なら特に不自由ないので「大変だな」程度にしか考えていなかったのだが、こうしてその影響をもろに食らう者がいようとは。

こうして足止めされてしまったアンジェリーカを目の当たりにし、「早く道がつながりますように」と願うばかりである。

一通り言い切って落ち着いたのか、アンジェリーカは、「ごめんなさいね。こんなこと言っちゃって。」とばつの悪そうに言った。

「でも、こういうわけなのよ。

道がふさがっちゃって、どうにもこうにもお手上げ状態。

それで、どうしようもなくなって、ひとまず計画を立て直そうってパナちゃんのところの宿屋にきたってわけ」

それから冒頭の部分に戻る。

アンジェリーカは、「あゝあ。」とスカートのすそを払ってその場にしゃがみこんだ。

パナの住むこのミネソタ村は、パキラ山の麓ふもとにあり、その雪解け水と山の幸の恩恵を受ける豊かな村だ。

背の高いその山の姿は、村のどこからでも望むことができるといわれ、村のシンボルにもなっている。

今いるこの庭からパキラ山を見ることができ、その雪の積もる頂いただきを眺めながら、「せつかく目の前まで来てたのになあ・・・」と悔しそうにつぶやいた。

「目的地ってどこだったんですか？」

パナの質問を聞いて、アンジェリーカはしゃがんだまま頭をおとした。

「パキラ山よ？」

あの山の中腹にある谷のところに、月下草が群生するって本で読んだことがあるの」

だから足止めが余計に悔しくって、とつぶやくアンジェリーカ。

そうなのだ、土砂でダメになっていいるというその道さえ越えることができたなら、後は探して作るだけでいい。月下草は見つかりにくいかもしれないけれど、群生と言うからにはそれなりに数はあるのだろつ。そうしたら、あとはフレデリクにも手伝ってもらって、必要量：

「アンジェリーカさん、それなら大丈夫かも知れませんか！」

愚痴るようにつらつらと流れた思考が、パナの大きな声によりさえ

ぎられた。

「え？」

「あるんです、パキラ山へ行く道！」

パナの言い切った言葉にアンジェリーカは面食らう。

「え、だって、道が通行止めだって・・・」

「それは、馬車を通る道なんです。馬車を通れるような、しっかりと、一定の道幅がある道のほうは土砂崩れで埋まってしまったですけど、私たち村人が木の実とかを採るときに使う細い方の道は、普通に通れるんです。」

だから、土砂崩れをしたと聞いても、特別生活が不便に感じることはなかったのだ。

アンジェリーカの話を聞いて、目的地が山を越えた向こうにあるのならそれはどうしようもないと思ったのだが、山自体が目的な話は別だ。

要はここから徒歩で登っていけばいいのだ。歩きのため、馬車よりは移動が大変になるが、急ぐことを優先するのならば何も問題は無い。

「・・・それを使えば、山までいける？」

「はい、いけます！村のおじさんたちが、土砂崩れがあつてすぐ確かめに行きました」

「・・・その道って、私たちでも登れそう？」

「はい！途中道がフクザツでわかりにくいですけど、私も何回も登ったことがあるので大丈夫だと思います」

「・・・山道にでるのに、どれくらいかかる？」

「ええ・・・っと。歩きなので時間はかかりますけど、道としての



長さはむしろ馬車の道よりは短いと思いますよ?」

ポツリポツリと聞いていたアンジェリーカの声に、次第に力が入ってくる。

「本当!? 本当なのね、パナちゃん!」

パナとのやり取りののち、アンジェリーカは顔を輝かせて立ち上がった。

パナは力強くうなづく。

アンジェリーカは喜びのあまり「ありがとうゝゝゝ」とパナをギョツと抱きしめた。

「ふみゆ! く、苦しいです」

「あ、ごめんごめん。でもありがとうパナちゃん!」

わーい、わーいと喜ぶアンジェリーカ。

パナの手をとってぴょんぴょん飛び跳ね、にこつと笑ったその顔は、急に年齢を落としたように無邪気に映る。

その笑顔が本当に嬉しそうで、同じくぴょんぴょんと飛び跳ねながら、パナは「よかったな」と心の底から思った。

「あ、アンジェリーカ。こんなところにいたんだ。」

喜びに踊るちょうどそこに姿を現したのがフレデリクである。

「頼まれたものは全部買っておいたよ。いま、部屋においてあるか

ら・・・ってどうしたの？何かすごく嬉しそうだけど」

こちらに向かって歩いてくるフレデリクに、アンジェリーカは興奮もそのまま駆け寄っていく。

「フレデリク！ 聞いてよ聞いて！」

今、パナちゃんから手がかりになりそうな話を聞いたのよ！」

嬉しそうなアンジェリーカ。

「手がかりって、あの山に行く？」

そうやって視線をパキラ山脈に走らせると、アンジェリーカは「そう！」と首を大きく縦に振った。

「パナちゃんが言うにはね、村の人たちが使う細い抜け道みたいなものがあるんですって。

それを使えば、あの土砂崩れの道を通らずに、目的の谷までいけるかもしれないの！」

しかも思ってたよりも早く。これでやっと薬が作れるわ！！

嬉しさを抑えきれず、パナと同じように手をとってぴょんぴょん跳ねる。

一時は計画が折れて中断しなければならなかったこと。

パナにはあえて言わなかったが、土地を治めている貴族との契約を破れば、信用を失い、下手したら領地追放だってありえたかもしれないのだ。

それも、駄目かもしれないとあきらめかけた状況のなかで、事情も事情だったために、精神的にもかなり追い詰められていた。

それが、幼い少女の言葉のおかげで不意に希望の光が見え始めたのだ。

立ちはだかっていた壁が取り除かれ急に道が開けた気がして、その喜びもひとしおなのである。

「それもこれも、ここにいるパナちゃんのおかげよっ」

パナに繰り返し感謝の気持ちを伝えようとして、体をひねった。

振り向いた先で視界の中に映ったパナは、「あちゃ〜」と、何かを言いたそうな顔をしている。

「パナちゃん？」

その表情の意味がわからず、アンジェリーカはさらに体を向けようとした。

が、うまく体が回らず、その原因を見るために、原因と思われる下にふと視線をおろす。

・・・つないだ手と、そのつないだ相手の顔が見えた。

「アンジェリーカ。君のその笑顔もかわいいな」

フレデリクがにっこり笑う。

「しっ、しまったあああああ！！！！！！！！」

フレデリクに連れて行かれたアンジェリーカがどうなったかは、薪

を催促されてお手伝いに戻ったパナにはわからなかった。

#### 第4話（後書き）

アンジェリーカは、夢中になると周りが見えなくなる癖があるようです（苦笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2927f/>

---

悩める少女と魔法薬

2011年10月5日06時25分発行